

## 2008年度海外研修・研究等助成事業 研修報告

## コミュニケーション力を育成する異世代交流活動を効果的に行うための授業づくりを考える

静岡市立商業高等学校 教諭 矢代 哲子

家庭科教師として、日頃の授業実践から、生徒の「家庭をつくる能力の欠如」が懸念される場面が多い。家庭は社会の最小単位であり、家庭経営の力は、その人の人生のみならず社会にも少なからず影響があると考えられる。

親や教員以外の世代と接する機会を設けることで生徒の内面的成長を図るため、地域のデイサービスセンターに訪問し交流活動を行った。事前学習として高齢者への接し方や質問の仕方を取り入れたが、それらのグループワークは不活発に終わった。また、「高齢者とどのように接したらよいか」と題した講義の感想には興味深い内容が寄せられたが、その講義には話し合いなど生徒の能動的な活動は含まれていない。

そこで、子どもの幸福度の総合評価が高い、教育・福祉先進国デンマークにおいて、「生きる力」「コミュニケーション力」を養うグループワークの組み立て方を学ぶことが、今後の授業の組み立て方の指針となるのではないかと考えた。

主な研修先は The International People's College (IPC) で、デンマークの教育システムの中では“フォルケ・ホイスコーレ”という成人教育に分類される学校である。ここでは約30カ国から国際理解に興味がある18歳以上の生徒約60名が全寮制で学んでおり、その功績により、国連からは Peace Messenger 賞をいただいている。

Management に関する授業は、先生の講義が最初に20分ほどあり、生徒はノートを取らずに集中して聞くことで、学ぶ興味とグループワークへの動機が湧いてくる。先生から与えられた課題を

グループで話し合った後、先生と生徒との意見のやりとりがあった。最後に Silent Communication を通して、Management とは何かを生徒に疑似体験させて授業は終了した。

講義を担当した Cha 先生はフィリピンの女子大で教鞭をとっていたそうであるが、グループワークの組み立て方を次のように説明してくださった。「全員を参加させて、お互いから学びあう。レクチャーはとても大切。グループワークはとても注意深く目的を設定し、意見を交換し、最後には何かを得なければならない。共通の意見、プランを共有しなければならない。」

家庭科で学ぶ知識・技能は、自分自身のみならず、他者と共生して生きていくためにも必要であるから、グループワークの手法は家庭科教師が特に身につけるべきだと感じた。

教育も福祉も日本は自国の良さを大切にしながらも変革していかなければならないことが多くあると思う。生徒が生きる喜びを感じられる学校生活を送れるよう、これからもアンテナを高く、志を高くもっていきたい。



IPC でのプレゼンテーション